

# 塙保己一

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

**塙 保己一**（はなわ ほきいち、延享3年5月5日（1746年6月23日） - 文政4年9月12日（1821年10月7日））は、江戸時代の国学者。幼名は丙寅にちなみ寅之助（とらのすけ）、失明後に辰之助（たつのすけ）と改める。また、一時期、多聞房（たもんぼう）<sup>[1]</sup>とも名乗る。雨富検校に入門してからは、千弥（せんや）、保木野一（ほきのいち）、保己一（ほきいち）と改名した。『群書類従』『続群書類従』の編纂者である。総検校。贈正四位。

子に伊藤博文と山尾庸三に暗殺されたとされる国学者塙忠宝がいる。



塙保己一 『国文学名家肖像集』より。原本は住吉広定（弘貴）筆（個人蔵、福島県指定重要文化財）

## 目次

- 1 生い立ち
  - 1.1 幼少時
  - 1.2 江戸に出てから学問を始めるまで
  - 1.3 学問の道
  - 1.4 検校となってから
- 2 逸話
- 3 著書
- 4 資料
  - 4.1 学術書
  - 4.2 一般図書
  - 4.3 映像
- 5 関連作品
  - 5.1 小説
- 6 参考文献
- 7 脚注
- 8 関連項目
- 9 外部リンク



塙 保己一和学講談所跡碑  
(東京都千代田区所在)

## 生い立ち

武州児玉郡保木野村（現在の埼玉県本庄市児玉町保木野）に生まれる。塙は師の雨富須賀一の本姓を用いたもので、荻野（おぎの）氏の出自。近世に帰農した、百姓の家系であるという。父は宇兵衛、母は藤木戸村（現在の加美郡木戸村）の名主斎藤理左衛門家の娘きよ。弟卯右衛門（うえもん）。

## 幼少時

幼少の頃から身体は華奢で乳の飲み方も弱く、丈夫ではなかった。草花を好み、非常に物知りであったという。5歳のときに疝（かん）の病気（胃腸病）にかかったのが原因で、目痛や目やにの症状が出て徐々に視力が弱っていき、7歳の春に失明した。あるとき、虎之助のことを聞いた修験者が生まれ年と名前の両方を変えなければ目が治らないと進言し、名を辰之助と変え、年を二つ引いた。しかし、目痛や目やには治ったものの、視力が戻ることはなかった。その後、修験者の正覚房に弟子入りして、多聞房という名をもらうも、視力は戻ることはなかった。手のひらに指で字を書いてもらい、文字を覚えた。また、手で形をさわったり匂いを嗅いだりして草花を見分けることができた。目が見えなくなっただけで和尚や家族から聞いた話を忘れることはなく、一言一句違わずに語ることもできたほど、物覚えが良かったという。10歳になると、江戸で学問を積んで立派な人間になりたいと考えるようになるが、両親が反対するだろうと悩んだ。宝暦7年（1757年）6月13日、母きよが過労と心痛で死去する。形見としてきよのお手縫いの巾着をもらう。巾着には23文入っていた。宝暦8年（1758年）、絹商人に「太平記読み」で暮らしている人の話を聞き、江戸で学問をしたいという気持ちがいっそう募っていた。<sup>[2]</sup>。

## 江戸に出てから学問を始めるまで

宝暦10年（1760年）、15歳（年を二つ引いて13歳と記している場合もある）で江戸に出、永嶋恭林家の江戸屋敷のもとに身を寄せる。約3年間を盲人としての修業に費やし、17歳（二歳引くと15歳）で盲人の職業団体である当道座の雨富須賀一検校に入門し<sup>[3]</sup>、名を千弥と改め、按摩・鍼・音曲などの修業を始めた。しかし生来不器用でどちらも上達しなかった。加えて、座頭金の取り立てがどうしても出来ず、絶望して自殺しようとした。自殺する直前で助けられた保己一は、雨富検校に学問への想いを告げたところ「3年の間たっても見込みが立たなければ国元へ帰す」という条件付きで認められた。

## 学問の道

保己一の学才に気付いた雨富検校は、保己一に様々な学問を学ばせた。国学・和歌を萩原宗固（百花庵宗固）に、漢学・神道を川島貴林に、法律を山岡浚明に、医学を品川の東禅寺に、和歌を閑院宮に学んだ。

塙保己一は書を見ることはできないので、人が音読したものを暗記して学問を進めた。保己一の学問の姿勢に感動した旗本の高井大隅守実員の奥方に、『栄花物語』40巻をもらい、初めて書物を所有した。のち、雨富検校の隣人の旗本・松平織部正乗尹（まつだいらおりべのかみのりただ）が講義を受けていた萩原宗固の講義をとともに聞くことになった。乗尹は保己一に系統立てた学問をさせる必要を雨富検校に説き、はれて、萩原宗固の門人として教えを受けることとなった。そして、宗固の勧めで漢学や神道を川島貴林（たかしげ）に、同時に律令を山岡明阿（みょうあ）（山岡浚明）に学んだ。宝暦13年（1763年）に衆分になり、名を保木野一と改めた。明和3年（1766年）、雨富検校より旅費をうけ、父と一緒に伊勢神宮に詣で、京都、大阪、須磨、明石、紀伊高野山などと60日ほどにわたって旅をした。明和6年（1769年）に晩年の賀茂真淵に入門し、『六国史』などを学ぶ。その年の10月に真淵が死去したため、教えを受けたのは、わずか半年であった。安永4年（1775年）には衆分から勾当に進み、塙姓に改め、名も保己一（ほきいち）と改めた。安永8年（1779年）、『群書類従』の出版を決意する。検校の職に進むことを願い、心経百万巻を読み、天満宮に祈願する。

## 検校となってから

天明3年（1783年）に検校となる。天明4年（1784年）、和歌を日野資枝（ひのすけき）に学ぶ。寛政5年（1793年）、幕府に土地拝借を願い出て和学講談所を開設、会読を始める。ここを拠点として記録や手紙にいたるまで様々な資料を蒐集し、編纂したのが『群書類従』である。また歴史史料の編纂にも力を入れていて『史料』としてまとめられている。この『史料』編纂の事業は紆余曲折があったものの東京大学史料編纂所に引き継がれ、現在も続けられている。同所の出版している『大日本史料』がそ



れである。盲人としても、寛政7年（1795年）には盲人一座の総録職となり、文化2年（1805年）には盲人一座十老となる。文政4年（1821年）2月には総検校になり、同年9月に76歳で死去。四男忠宝が跡を継いだ。

生家（埼玉県本庄市）は国の史跡に指定され、記念館も置かれている。墓所は東京都新宿区若葉の愛染院。

## 逸話



この節に雑多な内容が羅列されています。事項を箇条書きで列挙しただけの節は、本文として組み入れるか整理・除去する必要があります。（2014年3月）

- 保己一は学問の神であるとされた菅原道真と身分の低い家に生まれて天下統一を成し遂げた豊臣秀吉を尊敬していたという。
- すでに学者として有名だった平田篤胤、安藤野雁も、保己一の門に入った。日本外史を著した頼山陽も保己一に教えを請うた。その他、保己一の弟子は、中山信名（なかやまのぶな）、石原正明（いしはらまさあき）、屋代弘賢、松岡辰方（まつおかときかた）、長野美波留（ながのみはる）などがとくに有名な学者である。
- 昭和の名人と呼ばれた落語家、桂文楽がなくなる十数年前、胸をわずらったことがある。不吉なものを感じた文楽は、四代目柳家小さんの妹が「拝み家」をしていたことを思いだし、彼女のところにいって占ってもらった。すると「えらい坊さんが出ました。その坊さんは塙保己一と名乗り、文楽はまだ大丈夫だと語った」とお告げが出た。そこで文楽は、保己一の墓にいったんすっかり汚れている墓をきれいにした。寺の住職に過去帳をみせてもらおうと、同行していた五代目柳家小さんがその系図の最後の人を指差し、「この人は軍隊のときの自分の上官です。随分なぐられました」と語った（宇野信夫『私の出合った落語家たち』（河出文庫）より）。
- 『群書類従』の版木を製作させる際、なるべく20字×20行の400字詰に統一させていた。これが現在の原稿用紙の一般様式の元となっている。熊田淳美『三大編纂物 群書類従・古事類苑・国書総目録の出版文化史』（勉誠出版、2009年）に詳しい。
- 和学講談所で『源氏物語』の講義をしているときに、風が吹いて、ろうそくの火が消えたことがあった。保己一はそれとは知らず講義を続けたが、弟子たちがあわてたところ、保己一が「目あきというのは不自由なものじゃ」と冗談を言ったという。
- 辰之助（保己一）が江戸に出るときに同行した絹商人と、同行中に「お互いに出世しよう」と励ましあい、後に、その絹商人は、根岸肥前守（ねぎしひぜんのかみ）と名乗るようになったという出世話が語り継がれている。
- 和学講談所は、保己一の死後も子孫に引き継がれ、明治元年6月までの75年間続いた。
- 『群書類従』666冊が完成したのは、保己一が74歳のときである。34歳のときに決心してから41年後となる。
- 保己一は『続群書類従』1885冊を編纂したが、生前は版が出来上がらず、世に出ることはなかった。しかし保己一の死から100年余りが過ぎた1922年、続群書類従完成会が設立され、『続群書類従』出版事業が始まった。続群書類従完成会は、江戸時代の出版物の復刻を手掛けていた「国書刊行会」（1905年創業。現在の「株式会社国書刊行会」（1971年10月創業）とは無関係）を前身として創業。『群書類従』・『続群書類従』・『続々群書類従』、更に『史料纂集』の刊行を行

っていたが、2006年9月閉会(倒産)。閉会時の資本金は1500万円、従業員6名であった。同会の出版事業は2007年6月より八木書店に引き継がれ、続群書類従完成会発行の書籍も八木書店から発売されている。

- 嘉永4年（1851年）、保己一が編纂した『令義解』に女医の前例が書かれていることを根拠に女医の道が開かれ、荻野吟子が日本初の国公認の女医第一号となった。それまでは医者は男性しかなることができなかった。
- 1921年、昭和天皇が皇太子であったころ、ケンブリッジ大学を訪問した記念に『群書類従』を寄贈することを約束され、実弟である秩父宮が届けた。その他、『群書類従』は、ドイツの博物館、ベルギーの図書館、アメリカの大学等にも贈られた。
- 『群書類従』の版本は井上通泰、渋沢栄一、芳賀矢一、塙忠雄が創設した温故学会によって保存されている。1954年東京都重宝に指定された後、1957年に国の重要文化財に指定された。
- ヘレン・ケラーは幼少時より「塙保己一を手本にしる」と母親より教育されていた<sup>[4]</sup>。昭和12年（1937年）4月26日、ケラーは渋谷の温故学会を訪れ、人生の目標であった保己一の座像や保己一の机に触れている。ケラーは「先生（保己一）の像に触れることができたことは、日本訪問における最も有意義なこと」「先生のお名前は流れる水のように永遠に伝わることでしょう」と語っている<sup>[4]</sup>。
- 2000年、温故学会会館（東京都渋谷区）が登録有形文化財に登録された。
- 2010年より、塙保己一の生家がある埼玉県本庄市にて障害当事者で不屈の努力を続け社会的に顕著な活躍をしている人物、又は障害者のために様々な貢献をしている人物に「塙保己一賞」を創設。年1回の全国公募の後、表彰をしている。

## 著書

- 『花咲伝』（44歳のとき、「新葉集」を拠所として、長慶天皇の即位がなかったことを論証した書籍）

## 資料

### 学術書

- 塙保己一記念論文集
- 塙保己一論纂上・下
- 和学講談所御用留の研究 文部省助成出版
- 温故叢誌
- 塙保己一の研究 昭和56年刊行
- 塙保己一研究中江義照記念論文集
- 塙保己一事歴研究
- 塙保己一の生涯と「群書類従」の編纂 温故学会創立100周年記念出版
- 伴信友 著作集・家集・書翰集

### 一般図書

- 埼玉の三偉人に学ぶ 堺正一 埼玉新聞社
- 塙保己一とともに 堺正一 はる書房
- 奇跡の人・塙保己一 堺正一 埼玉新聞社
- 今に生きる・塙保己一 堺正一 埼玉新聞社
- 塙保己一の生涯 花井泰子 紀伊国屋書店 平成8年、保己一生誕250年を記念して出版。
- 人物叢書・塙保己一 太田善麿 吉川弘文館
- 盲目の大学者・塙保己一 温故学会
- 英文・Hokiichi Hanawa
- 素顔の塙保己一 堺正一 埼玉新聞社
- 塙保己一の生涯と群書類従の編纂 温故学会
- マンガ 塙保己一 原作・花井泰子、マンガ・しいやみつのり

## 映像

- 彫ラレタ記憶（VHS）紀伊国屋書店
- CD-ROM「群書類従」大空社

## 関連作品

## 小説

- 観音参りの女・塙保己一推理帖／中津文彦
- 移り香の秘密・塙保己一推理帖／中津文彦
- つるべ心中の怪・塙保己一推理帖／中津文彦
- 亥ノ子の誘拐ーいのこのかどわかしー・塙保己一推理帖／中津文彦
- 枕絵の陥し穴・塙保己一推理帖／中津文彦

## 参考文献

- 『盲目の大学者 塙保己一』 社団法人 温故学会
- 『塙保己一 論算』（上・下巻）社団法人 温故学会
- 花井泰子原作 しいやみつのりマンガ『マンガ 塙保己一』 星雲社

## 脚注

1. ^ 保己野村のすぐ近くの池田村に住む正覚坊（しょうかくぼう）という行者に、自分の弟子になれば治らぬ病気はないと言われ、父により弟子入りさせられ、多聞房と名乗ったが、失明は回復しなかった。
2. ^ 『塙先生伝』に「母をうしないてこひしのぶこと尋常ならず、是より漸く東都に出て、業を成すべき心起こされ」とある。
3. ^ 15歳で江戸に出て、雨富須賀一に入門したとする説もある。保己一の結婚まもなくの頃に書かれた随筆『一話一言』の中で、親友大田は、「十余歳にして江戸に出て、高井下総守殿につかふ」と記している。『温故先生伝』に「十三のとし江戸へいてて鍼術をまなひけるにすこふるその妙をえたり」「数年高井大隅守に宿居いた」とある。

4. <sup>^</sup>*a b* ヘルン・ケラー温故学会を訪問 ([http://www.onkogakkai.com/hellen\\_keller.htm](http://www.onkogakkai.com/hellen_keller.htm))

## 関連項目

- 百鍊抄
- 屋代弘賢（弟子）
- 雉岡城跡：塙保己一記念館が建てられた。
- 埼玉県立特別支援学校塙保己一学園

## 外部リンク

- 塙保己一史料館・温故学会 (<http://www.onkogakkai.com/>)（東京都）

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=塙保己一&oldid=53942162>」から取得

カテゴリ: 国学者 | 日本文学研究者 | 日本の文学研究者 | 江戸時代の歴史家 | 18世紀の学者 | 19世紀の学者 | 検校 | 武蔵国の人物 | 視覚障害を持つ人物 | 1746年生 | 1821年没

- 最終更新 2014年12月29日 (月) 11:58（日時は個人設定で未設定ならばUTC）。
- テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。